

氏 名 山 上 證 道
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学位記番号 論 文 博 第 349 号
 学位授与の日付 平 成 10 年 9 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 ニャーヤ学派の仏教批判
 — 「ニャーヤブーシャナ」(Nyāyabhūṣaṇa)知覚章の解読・研究 —

(主査)

論文調査委員 教授 徳永宗雄 教授 御牧克己 教授 荒牧典俊

論 文 内 容 の 要 旨

A 序論 (pp.1-69)

序論においては、本論で扱うテキストNyāyabhūṣaṇa (以下NBhūṣ) 第1章の特色2点について、その意義を論述した。特色の第1は、NBhūṣが、Naiyāyika間の多彩な議論を正統的解釈にこだわらず、網羅的に紹介している点であり、このテキストの年代論に関わる問題である。

また第2の特色は、広範な仏教認識論批判であり、それは同時に著者Bhāsarvajñaの仏教認識論への深い関心を示すもので、思想家としての彼の高い位置を示すものである。

(1) ニャーヤ諸文献とNBhūṣ (pp.1-14)

1936年のFrauwallner論文以来、Nyāyamañjarī (以下NM) が研究者の関心を集めた。ニャーヤ学派内で、Nyāyabhāṣya (以下NBh) からNyāyavārttikatātparyatīkā (以下NVTṬ) に到るまでの間に、多くのNaiyāyikaが、Nyāyasūtra (以下NS) 解釈をも含むあらゆる問題に関して各種多様な解釈を試みたと思われるが、それらの解釈の多くは、正統派文献においては、いわゆるNaiyāyika-ekadeśinとして無視され、むしろ仏教やジャイナ教文献に断片的にみられるのみであった。NMは、それらの解釈の多くを再現していたのであった。そこでまず、NBhūṣ出版以前に発表された諸論文で、NMの資料に關説した諸論を概観した。次に、NBhūṣの出版によりNMとNBhūṣとに共通の資料が存在していた可能性があり、しかも、それらは、NBh, NV, NVTṬといった、いわば正統ニャーヤ文献とは別の伝承に属していた可能性を示唆した1974年のOberhammer論文を紹介し、続いて、NMとNBhūṣとの関連性について本稿著者が詳論した諸論文(付論1)を参照しつつ、上記Oberhammer論文の仮説を補強できる資料を提示した。

NS1.1.4の知覚定義中にあるavyapadesya (「言葉で言い表されない」)の語に関する解釈は、NMの主な資料と見られてきたācārya (「師匠」)とvyakhyatr (「注解者」)の二者が、ともにNBhūṣにもみられるのみでなく、後者においては、それら二者の解釈が統合された、後にTrilocana説としてNVTṬが紹介する解釈へと繋がっていることが察知され、NMとNBhūṣ両者の前後関係も明確にせしめることが示される。さらに、saṃśaya (「疑い」)の定義であるNS1.1.23解釈とkaraṇa (「手段」)の定義であるsādhakatamaの語義解釈との吟味により、NMとNBhūṣ両者に存在したと思われる共通資料は、NVTṬのそれとは異なること、また、NMの資料であったacāryaは、Rucīṭikāの作者Adhyayanaである可能性が指摘される。さらに、siddhānta (「定説」)を扱ったNS1.1.26~31の諸解釈を吟味することで、NVTṬよりNBhūṣが時代的に若干先行する可能性が示唆される。かくして、NBhūṣの年代としては、比較的年代決定が明確に出来るNMとNVTṬとに挟まれた10世紀中葉が妥当とされる。

(2) Bhāsarvajñaの仏教認識論批判の構造 (pp.15~69)

NBhūṣ第1章に見られた他の特徴は、DharmakīrtiとPrajñākaraを中心とした仏教論理学派批判である。NBhūṣが綱要書Nyāyasāraの注釈書であるという性格上、このテキストにおいては、一見して連続性のない3部分に分けて仏教批判が展

開されているが、それらの議論を総合してみると、そこには明確な連続性があり、各部分が有機的に繋がっている批判であることが判明する。

(a) 経量部批判 (pp.15-30)

まず、最初になされる仏教認識構造の批判においては、Dharmakīrtiが議論の際に拠り所としている経量部の立場が鋭く追及される。「認識手段は、知識内に現れる対象形相性である」「知識と経験との斉合性 (avisamvāditva) のない知は正しい知識でない」と主張するDharmakīrtiに対し、「刹那減論を主張する限り、知識と経験との斉合性は確認できない。知覚の刹那と断定対象との斉合を確認する刹那とは異なるはずであるから」とBhāsarvajñaは述べ、知識内形相を主張して、しかも刹那減を主張する仏教経量部は、自己矛盾に陥ることを厳しく指摘する。この矛盾は経量部の理論では解決できないものである。このように、BhāsarvajñaはDharmakīrtiの究極的な立場が唯識であることを熟知しており、上記の議論は次になされる唯識理論批判のプロローグとみなされる。

(b) 唯識批判 (pp.31-58)

Bhāsarvajñaは、唯識批判を始めるに当たり、まず、外界を一切否定する唯識の論理を列挙して逐一それらを論破する。中でも、ニヤーヤ・ヴァイシェシカ実在論の根幹をなすavayavin (「全体」) 説については、自説擁護のために長大な議論を展開している。特に注目されるのは、avayavin説に関わる問題として、avayavinの色としてニヤーヤの主張する多様色 (citrarūpa) を批判する仏教の論理を逆手にとって、仏教論理学派、特にPrajñākaraの多様・不二論 (citrādvaitavāda) を否定していることである。ポストDharmakīrti時代の主役はPrajñākaraであるというBhāsarvajñaの態度がそこには見られる。

次に、Bhāsarvajñaは唯識そのものの批判に着手する。まず、Dharmakīrtiの知と対象との非別体性の主張を、(a) Pramāṇaviniścaya (以下PVin) I k.55ab, (b) k.55cd, (c) k.55cdに対する散文注釈の3部分に分けて吟味・批判する。(a) k.55abのsahopalambhaniyamātという証因の検討は、Śubhagupta以来諸文献に見られる手法をほとんどそのまま踏襲している。一方、(b)(c)の議論に関しては、Bhāsarvajñaの独自性が見られるが、いずれも、実在が存在してこそ知が発生するというニヤーヤ実在論の観点から、「認識されない限り対象は存在するとはいえない」という唯識独自の見解を真っ向から否定する。

さらに、知と対象との非別体性の根底には知のsvasamvedana (「自己認識」) 理論が存在するとみるBhāsarvajñaは、次に知の自己認識を、知の自照性という形で取り上げて批判する。知は自己を照らさずとも他を照らすものであり、知が外界でない理由は、知の自己認識にあるのではなく、知がアートマンの属性であるからである、というニヤーヤの自説を展開する。さらに、知は他の知より知られる、という認証式を提示し、自己認識論にこだわる限り、他の知、究極的には、他心を知ることができないという重大な欠陥に陥ることを明らかにする。

知の自己認識を正当づけようと唯識は、知の二相性、すなわち、知の主観的契機 (grāhakākāra) と客体的契機 (grāhyākāra) という2契機によって認識を説明しようとするが、この唯心論的思考は、他心の否定に繋がるとの非難をうけ、断定対象 (adhyavaseya) に対する断定 (adhyavasāya) によって人の行動が可能となることを述べる。しかし、Bhāsarvajñaは、断定対象も外界を承認しない限り、知が断定対象と結合しているという斉合性を確認することが出来ない、と否定する。

最後にBhāsarvajñaは、認識対象非存在論 (nirālambanavāda) を取り上げる。この問題に関してはDharmakīrtiは関心を示しておらず、従って、「夢の認識のごとし」と表現される唯識独特の知識論が、Prajñākaraの論書より引用・批判される。他心を容認しない唯識は、認識対象存在の論証そのものも否定することになり自己矛盾に陥ることが指摘され、ここでも他心の問題が重要視される。他心を否定すれば唯心論に陥り、肯定すれば外界の肯定へ一歩踏み出すからである。

以上のように、知と対象との非別体性をはじめとする、唯識を支える重要な見解を悉く否定して、Bhāsarvajñaは唯識理論の批判を終える。

(c) 仏教の主張するヨーギンの知覚、ならびに、無分別知の批判 (pp.59-69)

一切は唯識であるという論理がすべて論破されると、残った問題は、ただ光輝く知識のみと表現されるこの究極的真知とは何であるか、という問題である。Bhāsarvajñaは、それをPVinから引用して、Dharmakīrtiが主張する真知性を吟味する。Dharmakīrtiによると、勝義の世界における究極的真知とは、修習が完成し、悟りに到達したものに生じる、四聖諦を対象とした鮮明にして無分別な知のみである、と表現される。しかし、議論は世俗の立場でこそ可能であると主張する

Bhāsarvajñaは、このようなDharmakīrtiの真知の見解をも論理的矛盾は免れないと批判する。すなわち、知以外を承認しない唯識が、四聖諦を対象とする知を述べることは自己矛盾であり、刹那滅論と斉合性との矛盾はここでも免れないからである。

最後にBhāsarvajñaは、知覚は「分別を離れたものである」とする仏教知覚論の論拠をPVinより引用する。それは、知覚とは、本来、有分別なものであるとするニヤーヤ知覚論と真つ向から対立するものであり、自説擁護の立場からDharmakīrtiの所論を徹底的に否定して、Bhāsarvajñaは知覚章を終える。

(d) 以上、(a)(b)(c)で概観したように、Bhāsarvajñaの仏教思想に対する理解はきわめて深いものがあり、その批判の論鋒も鋭い。経量部や唯識学派の抱える論理的矛盾をニヤーヤの立場から鮮やかに暴き出していると言える。NBhūṣ第1章の有する最大の特色はこの点にあり、このテキスト全体が、DharmakīrtiとPrajñākaraを中心とする仏教論理学派批判を目的としたものであることは明らかである。

B 本論 (pp.70-277)

本論においては、NBhūṣ知覚章の内、仏教批判に相当する部分の和訳を試みた。それは、大別して、(1)正しい認識の手段 (pramāṇa) の語義の吟味より派生する問題として、仏教の認識構造を扱った部分 (pp.70-100)、(2) 認識対象の考察から派生する問題として、知識と外界との関わりと唯識思想を扱った部分 (pp.101-244)、(3) 知覚の定義から派生する問題として、ヨーギンの知覚、ならびに、仏教の非概念知の論証を扱った部分 (pp.245-277) の3部分より成る。訳文に先立って、細目・要旨を付したのは、古典期哲学文献に特有の煩瑣な議論展開を考慮してのことである。内容的に和訳と重複するが、内容把握のために有益であると考えたからである。注釈には、参考文献、マヌスクリプトとテキストとの異同、引用文献の同定など、可能な限り記入した。和訳した箇所議論内容に関しては、序論2がほぼそれに相当する。

C 付論 (pp.289-371)

(1) NMとNBhūṣに伝承された諸解釈 (pp.289-345)

序論1で述べたように、NMとNBhūṣは共通の資料に基づいたと思われる、そのことが特に顕著な部分を4箇所選んで考察した。3箇所はNS解釈であり、1箇所は手段 (karaṇa) の考察の部分である。

(2) avayavin余論 (pp.346-371)

ārambhavāda (「新造説」) と呼ばれるニヤーヤ・ヴァイシェシカ実在論の根底を成す理論が「全体」(avayavin) 説である。本論において幾度となく登場し、本論第2章はそのすべてが avayavin 説の正当性を主張するためのものであるとも言える。それゆえ、avayavin説の基本的構造の解説と、そのavayavin説を他の文献を利用して補強しようとしたBhāsarvajñaの試みとが述べられる。

論文審査の結果の要旨

紀元後一千年期後半に認識論の分野で、外界実在論をとるニヤーヤ学派と心識のみが存在すると主張する仏教唯識学派の間で激しい論争が繰り広げられる。バーサルヴァジュニヤ (Bhāsarvajña) (10世紀中葉) は、ニヤーヤ学派の側からこの論争に加わり、仏教認識論に対して厳しい批判を行った人物としてよく知られている。山上證道氏の学位請求論文『ニヤーヤ学派の仏教批判—ニヤーヤブーシャナ (Nyāyabhūṣaṇa) 知覚章の解説研究—』は、バーサルヴァジュニヤの著書『ニヤーヤブーシャナ』知覚章中の仏教批判に関する箇所を全訳してその内容を解説したものである。

本論文は、序論 (1-69頁)、本論 (70-288頁)、付論 (289-371頁) の三部分から成る。このうち本論は、これまで論者が京都産業大学論集に継続発表してきた『ニヤーヤブーシャナ』知覚章の和訳研究を、今回学位請求のために全面的に改訂したものであり、付論は論者が諸学術雑誌に掲載して来た関連諸論文を部分的に改訂したものである。また、序論の大部分は主に本論と付論の内容の解説からなり、全体として本論文は、過去30年に亘る論者の『ニヤーヤブーシャナ』研究の集大成となっている。このように本論文は翻訳・解説を主な内容とするが、このような例は欧米の学位論文にもないわけではなく、また、文献学を基礎とするインド学の場合、原典の解説研究自体貴重な業績と見なし得るので、この種の学位論文も許容されて然るべきものと思われる。

本論文の最大の功績として以下の四点を指摘することができる。まず第一に、『ニヤーヤスートラ』(Nyāyasūtra)、『ニヤーヤ

ヴァールツティカ』(Nyāyavārttika), 『ニヤーヤヴァールツティカ・タートパルヤ・ティーカー』(Nyāyavārttikatātparyatīkā)と受け継がれてきた正統ニヤーヤ学派の伝統に対して、散逸してしまったとみられるニヤーヤ学派傍流の思想内容を、認識論に関して論者が本論文で再構成した点である。尤も、この点は論者の独創というわけではなく、Frauwallner, Oberhammer, Steinkellner, Gupta, Wezlerといった先学の研究が既に出ているが、『ニヤーヤブーシャナ』の重要性に注目し、その中に見られる仏教認識論批判を訳してその内容を詳細に論じたのは本論文が初めてである。

第二点は、仏教思想批判を吟味する際、対論者となる仏教の思想を仏教文献の上に丹念に跡づけ、これまで充分理解されていなかった仏教文献の解明に新たな視点を提供した点である。たとえば、対論者の中心人物である仏教学者ダルマキールティ(Dharmakīrti)(600-660年頃)の『知識論決訳』(Pramāṇavinīśaya)はサンスクリット原典が散逸しており、従来チベット語訳によって研究が続けられてきたが、同書のかなりの部分が『ニヤーヤブーシャナ』に見出されたことにより、原典のサンスクリット文献を部分的に回収することが可能となった。また、もう一人の対論者ブラジュニヤカラクタ(Prajñākaragupta)(750-810年頃)の『知識論評釈注』(Pramāṇavārttikālamkāra=PV-Bhāṣya)は、1953年にラフラ・サーンクリティヤヤナ(Rahula Sāṅkrītyāyana)によって校訂されているが、このテキストには誤りが多く、かつ、写本のマイクロフィルムも不鮮明で解読が容易でないため、チベット訳を校訂した上で新たに改訂版をつくる必要が痛感されているが、その作業がほとんど進んでいない。その意味で、論者が『ニヤーヤブーシャナ』を通してこの難解なテキストに光をあてたのは大いに評価されるべきである。

第三に、バーサルヴァジュニヤによる仏教認識論批判の内容を詳細に和訳注解したことが挙げられる。ニヤーヤ学派からの仏教批判をこれだけまとめたかたちで紹介したのは本論文が初めてである。『ニヤーヤブーシャナ』はサンスクリット原典が出版されているのみで、その注釈文献もなく、チベット語訳のような補助資料もない。そのような、いわば孤立文献を、引用されている仏教文献を同定し参照する方法を駆使することによって、ひとまず信頼するに足るところまで解読し注解することに成功したことは評価できる。

第四に、バーサルヴァジュニヤが仏教認識論に関する詳しい知識を武器に、外界実在論の立場から仏教唯識学派の知覚論を厳しく批判し、相手の主張を自己矛盾に追い込んでいくプロセスを、具体的に明らかにした。とりわけ、基本的には唯識の立場に立ちながら知覚論に経量部説を利用するダルマキールティの論法、様々な要素(「部分」avayava)から構成された実体(「全体」avayavin)の存在を認めないにもかかわらず、多様な形象を持つ一つの認識対象を認める仏教認識論の矛盾を追及するところに、論者はバーサルヴァジュニヤの鋭い論法を認め、総じて、勝義・世俗の二諦を使い分けて認識を論じる唯識学派の論法を彼が突こうとしたことを明らかにしている。

以上四点に本論文の独自性と価値が認められるが、問題点もないわけではない。まず第一に、論者が『ニヤーヤブーシャナ』の写本のコピーを入手しながら体系的な批判校訂本作成の努力を行っていないことが挙げられる。特に第二の写本のコピーも入手しながら全くそれを参照していないのは惜まれる。第二に、論者の和訳は『ニヤーヤブーシャナ』知覚章仏教批判部分の初めての翻訳ということもあって、サンスクリット原典の読解に関して完璧と言いがたいところが残っている。第三に、論者が『ニヤーヤブーシャナ』知覚章から仏教批判の部分だけを抜粋して解読研究したため、ニヤーヤ学派認識論全体の中で、この章の内容がいかなる特色を有するかが明らかにされていない。この点は、論者の今後の研究に俟ちたい。第四に論文体裁の不備が挙げられる。長年にわたって順次発表された「細目・要旨」「和訳」「注解」を集成して本論を構成し、その後で序論を総説として付け加えたため、内容にかなり重複が認められる。また、訳注の配置、略号の使い方、ハイフォネーションの付し方にも不適切な点が少なくない。しかし、これらの欠点があるとはいえ、『ニヤーヤブーシャナ』知覚章の仏教認識論批判の箇所を初めて全訳・解説した本論文の価値を大きく損なうものではない。

以下審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。1998年8月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。